

韓国語のカタカナ表記について

－聞き取り調査による語中子音の傾向分析－

小川明美*

(e-mail: akmogawa@nsu.ac.kr)

目 次

1. はじめに
 2. 研究の背景
 3. 研究の目的と方法
 4. 調査概要
 5. 調査結果と考察
 6. おわりに
-

1. はじめに

近年の韓流ブームによって、韓国に対する関心が高まり、韓国の様々な事柄が日本人に紹介される機会が増えている。外国語を日本語表記する場合、普通カタカナで表されるが、韓国語も例外ではない。日本のマスコミなどで韓国の事柄が紹介される場合、日本人が韓国語の発音を耳で聞いて、最も近いと思われるカタカナで表記される¹⁾。

例えば、韓国風海苔巻き“김밥”は「キンパ」と記されることが最も多い²⁾が、そのほか

* 南ソウル大学校 専任講師

¹⁾ NHKに問い合わせたところ、「韓国語のカタカナ表記については、耳で聞いてより近いカタカナを使うことを原則」とし、「子音単独の音など日本語にない発音」については「ケースバイケースで判断」しているという回答を得た。

²⁾ 検索サイトgoogleのヒット件数による

にも、「キムパツ」「キンバプ」「ギムバプ」などと表されることもある。これは、①初声の“ㄱ”と“ㄷ”を清音で表すか濁音で表すか、②終声の“ㄹ”を“ㄴ”と表すか“ㄹ”と表すか、③終声の“ㄷ”を“ㅍ”“ㅂ”“ㅈ”のどれで表すか、という3点の組み合わせによって十数通りが考えられ、それらをどのように用いるかを定めた規準がないためである。個人の感覚によって任意に表記されているのが現状である³⁾。

また人名で言えば、李明博大統領は「イミョンバク」と、終声が「ク」で表される一方、サッカーの安英学選手は「アンヨンハッ」または「アンヨンハ」と、終声が「ッ」で表されたり、終声を表記しなかったりする。/bak/(박)も/hak/(학)も終声は同じ“ㄱ”であるが、その扱いは個人によって異なる。人名については個人が任意に決定し、マスコミなどはその公式発表に準拠した表記を用いているからである。

日本では現在、韓国語のカタカナ表記にあたって一定の規準がなく、それに該当する法令や告示なども存在しない。マスコミなどでは、公式発表のあった人名や地名を除き、独自の判断によりカタカナ表記しているようである。

そもそも、韓国語を原音に近い形で発音するようになったのは約30年前である。1984年7月、全斗煥大統領が来日した際、当時外務大臣であった安倍晋太郎が外務省に対して、人名の現地音読みを指示したと言われている。それまで「全斗煥」は「ぜんとかん」と日本語の漢字音読により発音されていたが、これにより「チョンドファン」と発音されるようになったのである。地名も同様で、例えば「仁川」は「じんせん」であったが、現在は「インチョン」と呼ばれている。約30年前までは韓国語を現地音で発音することがほとんどなかったため、カタカナで表記することも少なかったのである。

現地読みになるべく近い発音を用いることを「現地音主義」と言うが、韓国語に関してはこの現地音主義の歴史が浅いうえ、日本語より複雑な音韻体系の影響もあり、カタカナ表記の一定の規準がまだ確立されていないのだと思われる。しかし、今後、韓国との交流がますます深まり韓国語をカタカナで表す機会が増えていくことを考えると、カタカナ表記の一定の規準が確立されてもいいのではないだろうか。本研究は、それに向けての足がかりの一つとなるであろう。

2. 研究の背景

言語の音韻体系はそれぞれ異なるため、どんな言語であれ、他の言語の文字に正しく置き換えることは不可能である。韓国語は日本語より音韻体系が複雑なため、韓国語をカ

3) NHKでは「김밥についてはこれまでニュース原稿にあまり出ていないが、キムバプが有力である」という。

タカナで表記する場合、日本語をハングルで表記するのに比べ、多くの困難を伴う。特に検討を要すると思われるものは、韓国語の子音に関するものである。子音は韓国語に36種類あるのに対し、日本語は22種類で、そのうちほぼ同一だと思われる子音は13種類に過ぎないという(李(1987))。

子音に関してカタカナ表記が困難なものは、次の3点にまとめられる。

- 1) 語頭の平音・激音・濃音
- 2) 語尾のパッチム
- 3) 語中の平音・激音・濃音と語中のパッチム

まず、語頭の平音・激音・濃音については、これまで様々な分野で研究がおこなわれているが、これらの音の対立を多く扱ってきたのは、特に音響音声学研究の分野である。これまでに、平音・激音・濃音の閉鎖時間、VOT(声帯振動の開始時間)、FO(基本周波数)などが明らかにされてきている(宇津木(2009)、清水(1993)など)。聞き取りに関するものとしては、摩擦濃音の知覚に関する研究(韓(2011))や、日本人韓国語学習者の平・濃・激音の聴き取り調査による習得研究(古閑(2004))などがある。しかし、カタカナ表記と関連するものは管見では見当たらない。

語頭のカタカナ表記としては、例えば語頭の濃音“ㄷ”に促音を用い、例えば“딸기”を「ッタルギ」のように表したりする工夫が見られるほか、語頭の平音は、例えば“닭갈비”を「タッカルビ」とするか「ダッカルビ」とするかのような清濁のゆれがある。韓国語の平音・激音・濃音の対立は日本語の清濁の対立とは異なる弁別であるため、これまで多くの指摘がある(呷(2001)など)ように、その表記方法には限界がある。

次に、語尾のパッチムについては、ㄱ, ㄴ, ㄷ, ㄹ, ㄲ, ㅋ, ㆁをそれぞれ順に「ク」「ン」「ッ」「ル」「ム」「プ」「ン」と表すことが多い。このうち“ㄴ”と“ㅇ”を撥音「ン」で表すことと“ㄷ”を促音「ッ」で表すことに関してのゆれは少ないが、“ㄱ”を「ク」、「ㄲ」を「ル」、「ㄴ」を「ム」、「ㄷ」を「プ」とすることに関してはかなりのゆれがある。そもそも閉鎖音であるパッチムをカタカナで表記することには無理があり、これらを「ク」「ル」「ム」「プ」のように小さな文字にする工夫もある。しかし、拗音以外の小文字は本来の日本語表記には存在しないため、それらの文字を使うことに対する混乱を懸念する意見も多い(熊谷(2007)イ他(2012)など)。

最後に、1)と2)が単音または一拍で解決される問題であるのに対し、3)の語中の平音・激音・濃音と語中のパッチムについては二拍以上の語中を問題とする。これまでどの分野においても、特に二拍以上の語中を対象とした研究は見当たらない。しかし、カタカナ表記を考えた場合、語頭や語尾よりむしろ語中に表記のゆれが多い。

例えば、“있어요[이씨요]”の場合、1・2拍目をカタカナで「イツ」と促音を伴って表記するのが普通である。音響音声学的な見地から、語中の濃音は閉鎖時間が平音の3倍であることが明らかにされており(呷他(1999))、日本語母語話者には促音に似ていると認

識されているためであると考えられる。しかし、“떡볶이[떡뽕끼]”の2・3拍目は「トッポッキ」と促音を伴う表記だけでなく「トッポキ」や「トッポギ」と表記されることも多く、濃音が常に促音を伴って表記されるとは限らない。

また、語中の激音については、濃音とは反対に促音を伴わない表記の例が多く、例えば“부탁합니다[부타캄니다]”は「ブタカムニダ」と表されることが多い。しかし「プタッカムニダ」のように促音を用いることもあり、実際のところ、激音と濃音の閉鎖時間に有意な差はないという研究もある(Cho&Keating (2001))。

ところで、日本には韓国語のカタカナ表記に該当する法令や告示などはないが、韓国では、1987年に韓国文教部から発行された「국어의가나문자표기법」(以下「カナ文字表記法」とする)がある。韓国語の固有名詞をカタカナ表記する際の規準である。発音どおりに書くこと、つまり発音中心表記法に基づいており、音声・音韻論的な観念を十分反映した、非常に合理的な規準である。しかし、合理性を重視するためか、個々の例を取り上げてみた場合、現実的な面から離れてしまっていると思われるものもある。

3. 研究の目的と方法

カタカナ表記といった場合、次の3点からの視点が考えられるが、本研究はこのうちの2)の見地による。

- 1) 原つづりが連想されやすい表記
- 2) 韓国語の発音を日本語母語話者が聞いてカタカナで表す表記
- 3) 日本語母語話者がカタカナを発音して韓国語母語話者に理解される表記

本研究の目的は、日本語母語話者が韓国語を聞いた場合、どのように聞こえ、それを対象とする音は特に表記のゆれの多い部分である前章 3) の、語中の平音・激音・濃音と語中のパッチムとする。調査方法は聞き取り調査とする。分析方法としては、先行研究からの考察および、韓国で編修された「カナ文字表記法」と比較しながら考察していくこととする。

4. 調査概要

4.1 調査目的

パッチムに平音・濃音・激音が後続する場合、先行するパッチムおよび後続する平音・激音・濃音がどのようなカタカナ表記に最も近いかを聞き取り調査によって明らかにする。

4.2 テスト語、音声データおよび聞き取り用紙の作成

4.2.1 テスト語の作成

テスト語は二拍の無意味語とした。有意味語はそのカタカナ表記が既に通例化していたり、個人的にイメージとして持っている可能性がある。それらの可能性を排除するため、無意味語を作成した。

一拍目は母音を /a/ とし、パッチムなし及びパッチム7種(ㄱ, ㄴ, ㄷ, ㄹ, ㄺ, ㄻ, ㄽ)で構成した。つまり、/a/(아), /ak/(악), /an/(안), /at/(앗), /al/(알), /am/(암), /ap/(압), /ang/(앙)の計8つである。二拍目も母音は /a/ で、子音は平音・濃音・激音(ㄱ, ㄲ, ㅋ, ㆁ, ㄷ, ㄸ, ㅌ, ㄴ, ㄹ, ㄺ, ㄻ, ㄽ, ㅍ, ㅂ, ㅅ, ㅆ, ㅈ, ㅊ)の14種で/ka/(가), /k'a/(까), /kha/(카), /ta/(다), /t'a/(따), /tha/(타), /pa/(바), /p'a/(빠), /pha/(파), /sa/(사), /s'a/(싸), /ja/(자), /c'a/(짜), /cha/(차)とした。一拍目と二拍目を組み合わせたテスト語は(例1)のようなもので、これを1セットとし、一拍目を変えることにより、計114種のテスト語ができる。

(例1) /aga/(아가), /ak'a/(아까), /ak^ha/(아카),
 /ada/(아다), /at'a/(아따), /at^ha/(아타),
 /aba/(아바), /ap'a/(아빠), /ap^ha/(아파),
 /asa/(아사), /as'a/(아싸),
 /aja/(아자), /ac'a/(아짜), /ac^ha/(아차)

なお、発音変化により実際の発音には現れない、/akga/(악가)や/apsa/(압사)などの組み合わせは除いた⁴⁾。よって、テスト語は計97種である。

4.2.2 音声データの作成

上記ように作成したテスト語を読み上げ録音した。音声の録音にあたっては、韓国人韓国語教師(ソウル出身30代女性)に協力を得た。録音の際、一拍目については、同じパッチムごとに1セットとした。二拍目の平音・濃音・激音については順序がいつも同じにならないよう、ランダムに配列した。テスト語一つにつき一度のみ発音し、繰り返ししない。音声データの合計時間は約9分である。

4.2.3 聞き取り用紙の作成

聞き取り用紙は、音声データを聞いて最も近いと思われるカタカナを選択する形式である(例2)。該当するものがない場合は欄外に自由記入とした。また、用紙の最後にカタカナ表記に対する意見等を自由に記入する欄を設けた。

4) これらは実際の発音では/akk'a/(악까)や/aps'a/(압싸)に発音変化する。このような無声子音パッチム(ㄱ, ㄷ, ㅌ, ㅍ) + 語頭の無声子音(ㄱ, ㄷ, ㅌ, ㅍ, ㅅ, ㅆ)の組み合わせは15種である。

(例2)・聞いた発音は次のどれに近いと思いますか。

I	1.	1	a	アカ	b	アガ	c	アッカ
		2	a	アカ	b	アガ	c	アッカ
		3	a	アカ	b	アガ	c	アッカ

4.3 聞き取り調査の実施

- 1) 調査期間：2012年2月
- 2) 調査場所：愛知県C大学キャンパス内ほか
- 3) 調査対象：日本語母語話者 29名
 - うち韓国語講座受講学生…17名
 - 大学教員 …9名
 - その他 …3名
- 4) 調査対象の韓国語レベル
 - ①韓国語がまったく分からない…8名
 - ②ハングルが読める、簡単な会話ができる…16名
 - ③韓国語で日常会話ができる…5名
- 5) 調査方法

音声データの聴取後、即時選択を原則とするが、実施後の再聴は何度でも可能とした。また、必要に応じて事後インタビューを行った。

5. 調査結果と考察

5.1 語中の平音

パッチムがない場合および有声音パッチムに後続する場合、語中の平音は有声化するため、日本語母語話者には濁音として捉えられることが一般的に知られている。今回の調査結果からも、そのような回答が大多数を占め、これまで多くの先行研究で指摘されている通りの結果となった。

これは「カナ文字表記法」(표3(붙임1))とも完全に合致する。

<表 1> 語中の平音

아가	2	26 アガ	1	안가	1	28 アンガ	0
아다	0	29 アダ	0	안다	0	29 アンダ	0
아바	0	28 アバ	0	안바	0	29 アンバ	0
아자	1	28 アジャ	0	안자	1	27 アンジャ	1
앙가	2	27 アンガ	0	암가	0	9 アンガ	0
앙다	0	28 アンダ	0		1	19 アムガ	0
앙바	0	28 アンバ	1	암다	1	22 アンダ	0
앙자	1	28 アンジャ	0		0	6	0
알가	0	26 アルガ	0	암바	0	15 アンバ	0
알다	0	26 アルダ	0		0	14 アムバ	0
알바	0	27 アルバ	0	암자	0	12 アンジャ	0
알자	2	25 アルジャ	0		1	16 アムジャ	0

* 数字はレベルすべての合計、7人以上の回答はカタカナを表示

* 合計が29に達しない場合、自由記述回答があったことを示す

5.2 語中の濃音

パッチムがない場合、語中の濃音は促音を伴っていると捉えられることが多い。先述したように、音響音声学研究では語中の濃音は閉鎖時間が平音の3倍であるといわれており、これによって日本語母語話者には促音と認識されやすいと考えられる。

ところが「カナ文字表記法」では、/as'a/以外には促音を用いず、「アカ」「アタ」「アパ」「アチャ」とする。聞き取り調査とは大きく異なる結果となった。

<表 2> 語中の濃音

아까	0	0	27 アッカ
아따	3	0	23 アッタ
아빠	3	1	21 アッパ
아싸	1	-	28 アッサ
아짜	5	1	19 アッチャ

また、パッチムがない場合および無声音パッチム(ㄱ, ㄴ, ㄷ)の場合、少数ではあるが、語中の濃音が促音+濁音に聞こえるという回答があった。次の<表 3>のとおり、例えば、/ak'a/(아까)や/atk'a/(안까)は「アッカ」という表記がふさわしいというものである。同様に/t'a/(따)は「ッダ」、/p'a/(빠)は「ッパ」、/c'a/(짜)は「ッジャ」である。

このように濃音が濁音に聞こえることについては、日本語の無声音が無声有気で実現することがある(清水(1993))と関係があると思われる。つまり、例えば日本語母語話者が /pha/(파)を聞いた場合、それが無声有気であるため日本語の「パ」と判断しやすく、無声無気である/p'a/(빠)は消去法的に「バ」と判断するのではないだろうか。回答数は少数であるが、興味深い結果である。

＜表 3＞ 語中の濃音（濁音と捉えられる例）

아까 1 アッガ	알까 1 アッガ
아따 1 アッダ	알따 2 アッダ
아빠 3 アッパ	알빠 1 アッパ
아짜 4 アッジャ	알짜 3 アッジャ
악따 1 アッダ	압따 1 アッダ
악빠 1 アッパ	압빠 1 アッパ
악짜 3 アッジャ	압짜 1 アッジャ

5.3 語中の激音

語中の激音は、パッチムがない場合、/akha/(아카)以外は促音があると捉えられることが多い。濃音は日本語の促音と似ているという認識から、例えば/ac'a/ (아싸)は「アッチャ」と表記されることが多いが、激音/acha/(아차)についても「アッチャ」という表記が適当であるという結果が得られた。これは、濃音と激音の閉鎖時間はほぼ同じであるという先述の研究 (Cho & Keating (2001)) を裏付ける結果である。

/akha/(아카)のみは促音を伴わないという回答が多いが、これは母音/a/と/kh/(ㅋ)の調音点が近いことから、二拍目の/kh/(ㅋ)の調音開始までに時間がかからないため閉鎖時間が他のものより短く、よって促音は伴わないと判断するのではないかと考えられる。

また、有声音パッチムの場合、パッチムがない場合ほどではないが、語によっては促音を伴うと捉えられることもある。例えば、/angkha/(앙카)は約半数が「アンッカ」と促音があると感じている。しかし、どのような場合に促音を伴って認識されやすいのかについては、その条件を特定することが難しい。

「カナ文字表記法」では、激音は促音を伴わない清音で表すことになっているので、「アッタ」「アッパ」「アッチャ」「アンッカ」などが異なることになる。

＜表 4＞語中の激音

아카	23	アカ	0	6		
아타	10	アタ	0	19	アッタ	
아파	8	アパ	0	20	アッパ	
아차	5		0	24	アッチャ	
앙카	14	アンカ	0	15	アンツカ	
앙타	25	안타	0	4		
앙파	20	안파	0	9	안ツパ	
앙차	27	안차	0	2		
알카	17	アルカ	0	7	アルツカ	1
알타	18	アルタ	0	6		2
알파	25	アルパ	0	2		0
알차	17	アルチャ	0	9	アルツチャ	0
안카	18	アンカ	0	11	안ツ카	
안타	25	안타	0	4		
안파	18	안파	0	11	안ツパ	
안차	25	안차	0	4		
암카	19	アンカ	0	2		
	4		0	4		
암타	9	안타	0	1		
	12	암타	0	7	암ムッタ	
암파	9	안파	0	5		
	6		0	9	암ムツパ	
암차	17	안차	0	1		
	8	암차	0	3		

5.4 ㄱパッチム

ㄱパッチムに/sa/(사),/s'a/(싸)が後続する場合、ㄱパッチムは「ク」と表すという回答が多い。一方、/sa/(사),/s'a/(싸)以外は、「ク」ではなく促音「ッ」と捉えられることが圧倒的に多い。

「カナ文字表記法」の(표 6および(붙임 2))によれば「ㄱ, ㄷ, ㄹ 받침 아래에 ㄱ, ㄷ, ㄹ 초성이오는 경우」は「'ㄱ' 으로 적는다」とあり、つまり、ㄱパッチムで後続音がㄱ, ㄷ, ㄹの場合は促音「ッ」で、それ以外の場合は「ク」で表すとしている。それを適用すると、「アクタ」「アクパ」「アクサ」「アクチャ」のように、二拍目の子音が

ㄱ, ㅋ 以外の場合は「アク○」としなければならない。ところが、聞き取り調査の結果はこれと異なり、ㄱ, ㅋ 以外の場合 ㄷ, ㅌ, ㅍ, ㅈ, ㅊ, ㅊ, ㅈ, ㅊ, ㅈ, ㅊ においても、「ク」ではなく促音「ッ」を用いた表記である「アッタ」「アッパ」「アッチャ」という回答が多く見られた。

＜表 5＞ ㄱ パッチム

악까	1	0	26	アッカ
악카	7	0	20	アッカ
악따	3	0	20	アッタ
악타	6	0	15	アッタ
악빠	0	0	28	アッパ
악파	2	1	22	アッパ
악싸	0	-	6	23
악짜	2	1	15	アッチャ
악차	1	0	24	アッチャ

5.5 ㄷ パッチム

ㄷ パッチムも促音「ッ」に聞こえるという回答もあるが、「プ」と表されることも少くない。どちらが多いかはテスト語によって異なり、規則性は確認できない。

「カナ文字表記法」では「ㄷ, ㅌ 받침 아래에 ㄷ, ㅌ, ㅍ 초성이오는 경우」は「'ㅌ' 으로 적는다」とされており、二拍目の子音が ㅌ, ㅌ 以外の場合は「アプ○」とするべきである。しかし、聞き取り調査では/app'a/(압빠)と/aps'a/(압싸)以外は必ずしもこれと一致しないというデータが得られた。

＜表 6＞ ㄷ パッチム

압까	3	0	16	アッカ	10	アプカ
압카	1	0	18	アッカ	10	アプカ
압따	1	0	10	アッタ	17	アプタ
압타	0	0	22	アッタ	7	アプタ
압빠	0	0	28	アッパ	0	
압파	3	0	15	アッパ	11	アプパ
압싸	0	-	0		28	アプサ
압짜	2	0	14	アッチャ	12	アプチャ
압차	0	0	14	アッチャ	15	アプチャ

5.6 ㅌ パッチム

ㅌ パッチムについては、大多数が促音「ッ」で表すと答えており、これは従来の多くの表記とも「カナ文字表記法」とも共通する。

<表 7> ロパッチム

알까	3	0	25	アッカ
알카	8	0	21	アッカ
알따	2	2	23	アッタ
알타	3	0	26	アッタ
알빠	4	0	25	アッパ
알파	3	0	25	アッパ
알싸	3	-	26	アッサ
알짜	4	2	20	アッチャ
알차	3	0	26	アッチャ

5.7 ロパッチム

<表 8>は、後続音の聞き取りを含めた表で、ロパッチムにのみ注目し後続音を除いて集計しなおしたものが<表 9>である。これによると、ロパッチムは「ン」と表されることも「ム」と表されることもある。回答数はテスト語によってバラつきがあるが、半数以上において「ム」より「ン」と表すのがふさわしいという回答を得た。

「カナ文字表記法」では「'로' 받침 아래에 '로, 日, ㅁ, ㅂ' 초성이 오는 경우」は「'ㄴ' 으로 적는다」とある。つまり、二拍目の子音が日, ㅁ, ㅂの場合は「アン〇」で、それ以外は「アム〇」である。しかし、実際の聞き取りからは日, ㅁ, ㅂ以外の場合でも「ン」を選択する回答者が少なくないことが明らかとなった。

<表 8> ロパッチム (後続音の聞き取りを含む)

암가	0	0	9	アンガ	19	アムガ	1	0
암까	9	アンカ	11	アムカ	0	1	6	0
암카	19	アンカ	4	0	0	2	4	
암다	1	0	22	안다	6	0	0	
암따	17	안타	6	0	1	4	1	
암타	9	안타	12	아무타	0	0	1	7
암바	0	0	15	안바	14	아무바	0	0
암빠	14	안바	5	1	0	7	2	
암파	9	안바	6	0	0	5	9	아무ప్ప아
암사	6	23	아무사	-	-			
암싸	12	안사	9	아무사	-	-	3	5
암자	0	0	12	안자	16	아무자	1	0
암짜	7	안차	9	아무차	6	1	4	2
암차	17	안차	8	아무차	0	0	1	3

< 表 9 > ロパッチム（後続音の聞き取りを含まない）

암가	10 안	19 아ム
암까	15 안	12 아ム
암카	21 안	8 아ム
암다	23 안	6 아ム
암따	21 안	8 아ム
암타	10 안	19 아ム
암바	15 안	14 아ム
암빠	22 안	7 아ム
암파	14 안	15 아ム
암사	6 안	23 아ム사
암싸	15 안	14 아ム
암자	13 안	16 아ム
암짜	17 안	12 아ム
암차	18 안	11 아ム

5.8 ㅇ,ㄹパッチム

ㅇパッチムもㄹパッチムも、カタカナにした場合「ン」にするより他になく、実際に使われている表記を観察しても、ゆれはない。「カナ文字表記法」でも「ン」にするとしており、聞き取り調査もそのとおりの結果である。

< 表10 > ㅇパッチム

양가	2	27 안가	0
양까	24 안카	0	5
양카	14 안카	0	15 안цца
양다	0	28 안다	0
양따	16 안타	1	12 안цца
양타	25 안타	0	4
양바	0	28 안바	1
양빠	25 안파	0	4
양파	20 안파	0	9 안цца
양사	28 안사	-	1
양싸	11 안사	-	18 안цца
양자	1	28 안자	0
양차	27 안차	0	2
양짜	21 안차	1	7 안цца

<表11> レパッチム

안가	1	28	안가	0	
안까	16	안카	6	7	안цца
안카	18	안카	0	11	안цца
안다	0	29	안다	0	
안따	14	안타	3	12	안цца
안타	25	안타	0	4	
안바	0	29	안바	0	
안빠	21	안파	3	5	
안파	18	안파	0	11	안цца
안사	27	안사	-	2	안цца
안싸	20	안사	-	9	안цца
안자	1	27	안자	1	
안짜	15	안차	2	12	안цца
안차	25	안차	0	4	

5.9 ㄹパッチム

ㄹパッチムは<表12>の通り、ほとんど「ル」で表されるが、これに限らない独特の回答もあった。<表13>のようなものである。

<表12> ㄹパッチム

알가	0	26	알가	0		
알까	22	알카	1	4		
알카	17	알카	0	7	알цца	1
알다	0	26	알다	0		
알따	19	알타	0	7	알цца	0
알타	18	알타	0	6	2	
알바	0	27	알바	0		
알빠	8	알파	0	19	알цца	0
알파	25	알파	0	2	0	
알사	27	알사	-	1		
알싸	14	알사	-	13	알цца	0
알자	2	25	알자	0		
알짜	14	알차	3	9	알цца	0
알차	17	알차	0	9	알цца	0

＜表13＞ㄷパッチム（「ㄹ」以外で表される例）

/alga/(알가)	/alk'a/(알까) /alk ^h a/(알카)	/alda/(알다)	/alt'a/(알따) /alt ^h a/(알타)	/alja/(알자)
アイガ アイルガ	アリカ アリュガ	アイダ アエダ アリュダ	アイタ アエタ アリュタ	アリジャ
/alc'a/(알싸) /alc ^h a/(알차)	/alba/(알바)	/alp'a/(알빠)	/alp ^h a/(알파)	/alsa/(알사) /als'a/(알싸)
アエルチャ アリチャ	アイルバ アリバ	アイルッパ アリッパ	アイルパ アリバ	アイサ アイルサ

5.10 意見および事後インタビュー

韓国語のカタカナ表記に対する意見からは、カタカナの発音が必ずしも韓国語の正しい発音にならないことを自覚していることが伺える。

- ・カタカナで発音しても韓国人には通じないのではないか
- ・カタカナ読みをしても通じるのであれば、いいと思う
- ・実際に使うとなると、カタカナ表記はふさわしくない
- ・実際の読み方とは異なるので注意しなければならないと思う
- ・覚えやすいけど、発音になまりがでそう

しかし、発音面で憂慮する半面、肯定的に考える意見も多い。特に韓国語レベルが低い場合、つまりハングル文字が読めない場合に、発音の補助的な役割として容認していることが分かる。

- ・ハングル表記を見て読むより読みやすくていい
- ・韓国語を読みたいという場合に分かりやすくていい
- ・覚えるときに便利
- ・読むことができるからいい
- ・入門期のとっかかりとしてはいいと思う

その一方で、韓国語レベルが高い場合には否定的な意見もある。

- ・ハングルを読むことに慣れているため分かりづらい
- ・いろいろなバリエーションがあって混乱する

また、パッチムを小さく書くことについて触れる意見もある。それが適切かどうかについては可否が分かれたが、韓国語初級学習者に肯定的な意見が多かった。これは学習テキストの影響だと思われる。学習テキストにはハングル文字と発音規則の習得を補助する目的

で、ハングル表記とともにカタカナを併記することが少なくない。普段の学習の際に見慣れているために、肯定的な印象を持っていると考えられる。

- ・小さく書くのを見たことがあるが、分かりやすいと思った
- ・小さい文字を使うほうが分かりやすい

事後インタビューでは次のような意見が聞かれた。（（ ）内は韓国語レベル）

- ・違う音だと思っても書き表せないで、迷う。（全く分からない）
- ・例えば/amba/の場合、選択肢に「アムバ」とあるので、「ム」と聞こえてしまうのかもしれない。もし選択肢が「アンバ」だけなら、それを選択したかもしれない。（ハングルが読める）
- ・例えば /apk'a/ を聞いた場合、ヨパッチムの /p/の音が聞き取れてしまうので、「プ」を入れたくて「アプカ」とした。（日常会話ができる）

6. おわりに

今回行った調査により、語中の平音・濃音・激音、および語中のパッチムがカタカナでどのように表されるか、ある程度の傾向を示すことができた。「カナ文字表記法」との比較においては、異なるものもいくつか認められた。本研究は、カタカナ表記の規準確立に向けての足がかりの一つとなるであろう。

しかし、全体的に全員一致という回答は少なく、テスト語のほとんどに意見のバラつきがあった。特に問題は、促音を伴うかどうか、またパッチムの子音が「ク」「ル」「ム」「プ」に聞こえるのか否かという点である。どのような条件下でどのように聞こえるのかといった音声学的な考察を、今後深く追求していく必要がある。

また、次回の調査では事後インタビューの結果をふまえ、読み上げ順序の妥当性の問題を改善し、聞き取り用紙の選択肢を減らすなどの工夫を行う必要がある。今回は少人数の調査しか行えなかったが、今後より多くのデータによって精密な結果を得たい。その際、日本語母語話者の韓国語レベルや出身地についても十分考慮したい。

さらには、語頭の平音・濃音・激音や語尾のパッチムについても調査を進め、将来的にはハングルのカタカナ表記について一定の規準を確立できればと思う。

【参考文献】

- 배석주(2001) 「일본어 편수자료 국어의 가나 문자 표기 연구」 『국제언어문학 제4호』 국제언어문학회 51-67
- 배석주(2002) 「국어의 가나 문자 표기의 개선 방향 : 외래어 표기법과 균형과 조화의 측면을 중심으로」 『일본어교육연구제20집』 한국일본어교육학회 13-32
- 배재연, 신지영, 고도홍(1999) 「음성환경에 따른 한국어 폐쇄음의 음향적 특성 : 시간적 특성을 중심으로」 『음성과학5(2)』 139-159
- 이경철 · 김대영(2012) 「국어의가나문자표기법(2002)의 문제점」 『한국일본어문학회, 한국일본어문학회 학술발표대회논문집』 47-50
- 이덕봉 (1988) 「韓語의가나문자表記法」 『동일어문연구3』 동일어문학회 3-17
- 宇都木昭(2009) 「日本語と朝鮮語の破裂音—音響音声学的研究の概観—」 『北海道言語文化研究 7』 北海道言語研究会 11-27
- 梅田博之(1989) 「韓国語の仮名表記」 『講座日本語と日本語教育9日本語の文字表記(下)』 明治書院 28-57
- 金 泰虎(2000) 「日本における韓国語学習用テキストの発音表記と学習者」 『東アジア研究 通号28』 大阪経済法科大学アジア研究所 53-66
- 熊谷泰明(2007) 「朝鮮語辞典におけるカタカナ発音表記」 『韓国語教育論講座1』 くろしお出版 629-653
- 古閑恭子(2004) 「日本語を母語とする韓国語学習者による韓国語の平音・濃音・激音の発音と聴き取り—聴き取りテストの結果をもとに」 『東京成徳大学 研究紀要11』 4-15
- 清水克正(1993) 「閉鎖子音の音声的特徴—有声性・無声性の言語間比較について」 『アジア・アフリカ言語文化研究45』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 163-175
- 韓 喜善(2011) 「韓国語ソウル方言の語中摩擦濃音に対する母語話者と日本人学習者の知覚判断—摩擦区間長と先行母音長が与える影響を中心に」 『音声研究15(2)』 日本音声学会 11-22
- 堀誉子美(1996) 「仮名によるフィンランド語固有名詞の表記基準に関する考察」 『横浜国立大学留学生センター紀要3』 4-15
- 延鎮淑, 崔昇浩(1999) 「聞き取り調査からみた日本語を母語とする韓国語学習者の韓国語音声の問題点」 『信州大学教育システム研究開発センター紀要(5)』 87-92
- Cho&Keating(2001) “Articulatory and acoustic studies of domain initial strengthening in Korean” : Journal of Phonetics 29 155-190

要 旨

韓国語を日本語表記する場合、普通カタカナで表されるが、日本では現在、カタカナ表記にあたっての規準がない。

カタカナ表記が困難な点は子音に関するもので、1) 語頭の平音・激音・濃音 2) 語尾のパッチム 3) 語中の平音・激音・濃音と語中のパッチムの3点がある。このうち1) については音響音声学研究の分野で多く扱われ、聞き取りに関する研究も見られるが、カタカナ表記に関連するものはない。実際にカタカナ表記をした場合、1) と2) にも表記のゆれが散見されるが、最も多いのは3) である。

本研究は、3) についての聞き取り調査を行い、韓国文教部から発行された「国語のカナ文字表記法」と比較しながら考察する。

調査は、二拍の無意味語によるテスト語を録音し、音声データを聞いて最も近いと思われるカタカナを選択する形式で行った。

調査の結果、語中の平音は濁音で、濃音は促音を伴う表記がほとんどだった。激音はパッチムがない場合は促音を伴うことが多かった。これらについては、音響音声学的研究の見解と一致する結果である。

パッチムについては、従来ゆれの少ないㄷパッチムは「ッ」、ㅇ,ㄴパッチムは「ン」という回答がほとんどだった。ㄱパッチムは「ク」、ㅂパッチムは「プ」と表記されることもあるが、後続子音によっては促音「ッ」で表される。どのような条件下で促音と捉えられるか、特定は困難である。ㄹパッチムは「ム」より、全体的には「ン」を選択する回答のほうが多かった。ㄹパッチムは「ル」と表されることが多いが、「ル」以外の独特な表記も見られた。

今回の調査により、語中の平音・濃音・激音、および語中のパッチムがカタカナでどのように表されるか、ある程度の傾向を示すことができた。「カナ文字表記法」との比較においては、異なる点もいくつか認められた。

韓国語のカタカナ表記の機会は増えつつあり、今後カタカナ表記の規準確立が必要となる。本研究は、それに向けての足がかりの一つとなるであろう。

キーワード：平音・濃音・激音、パッチム、カタカナ表記、規準、聞き取り調査、
現地音主義

투 고 : 2012. 8. 31
1차 심사 : 2012. 9. 15
2차 심사 : 2012. 10. 6